

日本の作家とキリスト教

—二十人の作家の軌跡—

久保田暁一

朝文社

日本の作家とキリスト教
—二十人の作家の軌跡—

久保田暁一

朝文社

日本の作家とキリスト教——目次

一、キリスト教と近代日本文学……………5

I 近代日本文学の一視点——序にかえて……………6

II 内村鑑三の文学観とその弟子たち……………13

二、日本の作家とキリスト教……………29

(1) 北村透谷とキリスト教……………30

(2) 島崎藤村——『破戒』……………37

(3) 木下尚江——『火の柱』……………43

(4) 正宗白鳥とキリスト教……………49

(5) 有島武郎とキリスト教……………55

(6) 国木田独歩とキリスト教……………61

(7) 志賀直哉とキリスト教……………67

(8) 武者小路実篤——『耶蘇』……………74

(9)	長与善郎——『青銅の基督』	80
(10)	山村暮鳥とキリスト教	86
(11)	倉田百三とキリスト教	93
(12)	芥川龍之介のキリスト観	99
(13)	堀辰雄とキリスト教	105
(14)	八木重吉の詩	111
(15)	太宰治——負の十字架の文学	119
(16)	椎名麟三とキリスト教	125
(17)	遠藤周作——『沈黙』	131
(18)	島尾敏雄——『死の棘』	137
(19)	三浦綾子の信仰と文学	144
(20)	曾野綾子——『神の汚れた手』	150

三、キリスト者作家の作品をめぐって	157
I 倉田百三の『出家とその弟子』と『布施太子の入山』をめぐって	158
II 椎名麟三『自由の彼方で』をめぐって	181
III 三浦綾子『泥流地帯』について	202
IV 遠藤文学の主題とその視点	231
参考文献	250
初出誌	253
あとがき	254

高須賀
優

キリスト教と近代日本文学

I 近代日本文学の一視点

序にかえて

私は近・現代の日本文学史の流れを考える場合、その一視点としてキリスト教と作家達との関わりを辿ることが重要だと考えている。「聖書一卷によりて、日本の文学史は、かつてなき程の鮮明さを以て、はっきりと二分されている」(『Human Lost』)と太宰治は書いたが、けだし名言である。

多神的で汎神論的な日本の宗教風土下においては、一神教で創造神を信ずるキリスト教の布教は、歴史的に見て甚だ薄幸な運命を辿ってきた。そのことは、一五四九年(天文十八年)にシャビエルによって伝えられたカトリック教が、一五八七年(天正十五年)に豊臣秀吉によって禁教され、一六三八年(寛永十五年)の島原の乱以後には江戸幕府によって徹底的に弾圧されたという歴史的事実を一瞥しても明らかである。江戸幕府による切支丹の弾圧がいかに苛酷なものであったかは、いろいろな歴史の文献から知りうるのであるが、文学作品、たとえば遠藤周作の『沈黙』、長与善郎の『青銅の基督』、三浦綾子の『海嶺』等々にも書かれている。しかも太平洋戦争時には、キリスト教は日本の国体にそぐわないとして抑圧されてきたし、更に、人格的一神教で

あるキリスト教は、多神的・汎神的風潮の強い日本の宗教風土に根づく素地は希薄であった。

厳しい鎖国政策と切支丹弾圧を続けてきた徳川幕府が倒れ、一八六八年に明治政府が発足して日本は近代的な統一国家への歩みを始めた。新政府は、「旧来ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基クヘシ」「知識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スヘシ」（「五箇条の御誓文」）のスローガンのもとに、欧米先進諸国の文明を急速に吸収する政策をとった。しかし、キリスト教禁制の高札が撤廃されたのは明治六年（一八七三）になってからであり、それまでは依然としてキリスト教の宣教は白眼視されていた。というのも、明治新政府の指導者たちが目標としたことは、日本を欧米先進諸国に比肩する近代国家になし、富国強兵と殖産振興を推進することであり、その推進のための精神的支柱を、天皇制の確立と国家神道の制定に求めたからである。しかし、思想・信仰の自由を認めない国家は近代国家の名に値しないし、西欧諸国との交流が深まると共に新政府の指導者もキリスト教布教を公認せざるを得なくなった。

かくて、明治以降においてキリスト教の布教活動が盛んになり、多くの青年達がキリスト教の門をたたくに至った。彼ら青年達は、キリスト教の中に、それまでの日本人を支配していた儒教道徳、封建道徳の桎梏から脱して、愛と平等を基調とする人道主義を求めたのである。その意味で、明治期におけるキリスト教は、時代を導く一つの革新的な思想であった。ちなみに明治期におけるキリスト教界の有力な指導者となった植村正久は明治六年に受洗しているし、内村鑑三、新渡戸稲造らは明治十一年に受洗している。

文学の面においては、北村透谷、島崎藤村をはじめとして山路愛山、徳富蘆花、木下尚江、国木田独步、正宗白鳥、有島武郎、山村暮鳥、志賀直哉等々が、若き日にキリスト教を求め受洗している。しかし彼らの多くは、その信仰が定着しないまま、文学の道に進むとともに教会から去っている。その一例として「文学界」の同人であった北村透谷（一八六八—一八九四）の挫折と島崎藤村（一八七二—一九四三）の離教について一瞥しよう。

透谷は明治二十一年、数寄屋橋教会で田村直臣より受洗し、藤村も明治二十一年、高輪の台町教会で木村熊二より受洗している。二人は、木村熊二が創立した明治女学校で教鞭をとった仲であり、巖本善治が編集人であった「女学雑誌」から独立して「文学界」の同人活動も始めている。そして透谷は、明治初期の浪漫主義文学を代表する旗手として活躍した。彼の『楚囚の詩』（明治22）『蓬萊曲』（明治24）『厭世詩家と女性』（明治25）『内部生命論』は注目を集めた。彼は、自由民権運動の後、キリスト教の洗礼を受け、ヒューマニズムの立場から封建的な道徳のリバイバルを唱えた硯友社の文学と対決し、「好色」と「恋愛」の相違を説いて人間性の解放を唱えた。しかし、透谷は生活に窮迫し、精神的にも疲れ、弱冠二十五歳で自ら命を断った。

藤村は透谷の自殺に大きな衝撃を受け、友人の死を悼んで『透谷全集』を刊行しているし、また『春』『桜の実の熟する時』に透谷との交遊を書いている。だが、透谷と違って藤村は生き抜き、浪漫的な詩から転じて『破戒』によって自然主義作家として注目を集め、それ以降も半世紀にわたって創作活動を続け、『春』『家』『新生』『嵐』『夜明け前』等の作品を書き、日本文学史上

に大きな足跡を残した。今日の時点から見れば、『破戒』は被差別部落解放の視点において、主人公の瀬川丑松が被差別部落の出身であることをひたすらに隠そうとしたり、自らを卑しめて土下座して生徒に詫びたり、日本を去って生きる道を求めたことなどの姿勢に決定的な弱点があるけれども、この作品は、田山花袋の『蒲団』と共に、日本における自然主義文学の先駆的・画期的な作品と評価されたのである。また、『破戒』が、ドストエフスキーの『罪と罰』の影響を受けて書かれていることは藤村の西欧文学との接触を確かめる上でも重要なことである。しかし、藤村の歩みの上で注目したいのは、彼がキリスト教から去っていることである。藤村は、明治学院在学中に受洗したにもかかわらず、数年後に教会へ退会届けを出し、深刻な苦しみもなくキリスト教から去っている。ということは、彼にとってキリスト教は、彼の血肉に食い込むことのなかった一時的、気分的なものに過ぎなかったと言えることができるのである。

今、透谷と藤村について一瞥したが、キリスト教に対する対応の仕方は、もちろん各作家によって千差万別である。しかし、彼らの大半がキリスト教信仰と文学を両立させることが出来なかった点では軌を一にしている。その点を明らかにするとともに、彼らがそれぞれ、どのようにキリスト教と関わってきたかを確認することは、近代の日本文学を考える上での一視点として極めて大切なことだと思う。

さらに、大正期におけるキリスト教と文学者との関わりという点において見逃すことが出来ないのは、芥川龍之介（一八九二―一九二七）である。芥川は信仰者ではなかったが、『奉教人の死』

『きりしとほろ上人伝』『神々の微笑』など切支丹物に取材した作品を多く書いた。そして、一九二七年（昭和二年）七月二十三日に『続西方の人』を書き上げ、翌二十四日未明、ペロナルおよびジャールの致死量を飲んで自宅で自殺した。枕元には一冊の聖書が置かれていた。

芥川の死は、堀辰雄（一九〇四―一九五三）に深い影響を与えた。堀辰雄は、『芥川龍之介論』『エマオの旅びと』『聖家族』などを書き、芥川の死を起点にして自己の生を深めていく姿勢を示した。そして、芥川と同じく信仰者としてではないが、聖書とキリスト教に深い関心を持ち、それが作品に投影されている。遠藤周作は初期の論文「堀辰雄論覚書」で、堀辰雄の宗教性について論じており、芥川から堀、堀から遠藤に至るカトリック文学の一つの流れを見ることが出来るのである。

また、芥川から影響を受けた作家の一人に太宰治（一九〇九―一九四八）がある。太宰治は、芥川の『西方の人』『続西方の人』のようなキリスト伝は書いていない。しかし太宰は、聖書を熱心に読むことによって、身をさいなみつつ、罪の意識と世の不純なものに対するプロテストの意識を深め、主に新約聖書からであるが、作品に百回近くも聖書の言葉を引用している。その点に注目すれば、太宰は生を否定する負の十字架の立場ではあったが、聖書の言葉を血肉化しつつ聖書に関わった作家であったと言うことが出来るであろう。

その出身階層と作風と思想的到達地点等において太宰治と対照的なのは椎名麟三（一九一〇―一九七三）である。『深夜の酒宴』によってデビューして以来、椎名はドストエフスキーの文学

からの影響もあり神の問題と深く関わりつつ作品を書き、復活の信仰にもとずいて『邂逅』を書くに至った。

今日、キリスト者作家の活躍はめざましい。汎神的で一神教には馴染まない日本の精神風土の中で、遠藤周作をはじめとするキリスト者作家達が着実な歩みを示しているのは特筆すべきことである。

遠藤周作の一連の諸作品、特に『海と毒薬』と『沈黙』は、日本人の罪の意識、キリスト教不毛の精神風土、弱者の複権を追求して注目された。遠藤が書くキリストは、無力だが愛に満ちた同伴者イエスである。そのイエスの愛を、日本の読者にも浸透するように語り、広く日本の読者を獲得してきた。

遠藤と同じくカトリック出身の曾野綾子は、昭和二十九年に「三田文学」に発表した『遠来の客たち』が芥川賞候補作品に選ばれてデビューし、それ以来、『黎明』『たまゆら』『無名碑』『神の汚れた手』ほか等の作品を書き、活躍している。

故人となったが島尾敏雄（一九一七―一九八六）は昭和三十一年にカトリックの洗礼を受けており、『死の棘』『われ深きふちより』『出発は遂に訪れず』等の作品を書いている。それらの作品には、カトリック作家として贖罪の意識と魂の救いを求める祈りが深く滲み出ているのである。

その他、カトリックまたはプロテスタントの洗礼を受けて活躍している作家として、三浦綾子、小川国夫、三浦朱門、阪田寛夫、森内俊雄、高橋たか子、矢代静一、阿部光子ほか等がいる。

こうして現代のキリスト者作家たちが活躍しているのは、個々の作家たちの力量もさることながら、今日の時代の文学が、愛、罪、死、人間の限界——こうした人間の実存の基本的問題、魂の問題に深くメスを入れて追求することを求められており、その点でキリスト者作家がキリスト教と関わることによつて、より深く追求する視点と糧を得ているからであると考えられる。小説は卑近な日常的真実を客観的に微細に書くだけのものならば、そして人間の実存のあり様に深くメスをいれなければ、皮相的なものになる。

以上述べてきたように、キリスト教と近代文学との関わりは深いのであり、キリスト教と関わってきた作家たちが、どのように関わってきたかを明らかにすることが本書の課題である。その意図のもとに「日本の作家とキリスト教」と題して二十人の作家を取り上げたのである。しかしその前に、明治期の作家達に大きな影響を与えた内村鑑三の文学観にふれておきたいと思う。これまでに記してきたことと深く関連するからである。

II 内村鑑三の文学観とその弟子たち

広く知られているように、内村鑑三（一八六一—一九三〇）は植村正久と共に明治期における青年の信仰上の指導者として、また近代日本の独創的な思想家の一人として著名である。特に、日露戦争に対する非開戦論者、無教会主義の伝道者であったこと、および、第一級の著作者として多数の幅広い著述をしてきたことなどは、容易に他の追隨を許さないものがある。しかし、ここで私が特に問題にしたいと思うのは、内村の文学観とその功罪、および作家たちとの関わりについてである。それと関連して日本におけるキリスト教文学の可能性について考えてみることにある。

考えてみると、内村鑑三ほど明治・大正期の作家たちと関わりを多く持ち、それらの作家たちに大きな影響を与えた宗教者はいないであろう。そのことについては、多くの評者・研究者によって指摘され論じられている。たとえば鈴木範久は、その著『内村鑑三をめぐる作家たち』（玉川選書）の「序文として」の冒頭に、次のように指摘している。

「『聖書』一巻によりて、日本の文学史は、かつてなき程の鮮明さを以て、はつきりと二分されてゐる

る』と言ったのは太宰治であつた。同じような表現を借りるならば『内村鑑三によって日本の文学史は二分される』と言うことができるかもしれない。近代日本の文学の歴史を少しでもひもとく人は、ただちに、そこにしきりと現れる内村鑑三の名を見出すことになるであろう。今述べた太宰治自身も一時は内村の書により、うちのめされた人であつた。

雑誌『国民之友』や『東京独立雑誌』を通じて内村の思想や文学論にふれた国木田独歩、正宗白鳥、魚住折蘆、小説『背教者』を書いた小山内薫、白樺派に属する有島武郎、志賀直哉、長与善郎、内村の没後とはなるが、その思想に強くひかれた太宰治、亀井勝一郎、保田与重郎などの日本浪漫派の人々をはじめ、その数は多い。もしこれらの文学者の名を除いたならば、近代日本の文学史は書けないということは、少なくとも言えそうである。

ところで、この文学者たちのなかには、その若き日に、長期にわたり内村のもとに通つて聖書を学びながら、そのもとから離れた者が多かつた。」

さらに一、二の例を挙げるならば、山形和美は「内村鑑三の文学観——その功利的態度からくる眼のくもりについて——」と題する論文（『本の手帖』五月号昭和四十二年五月一日発行 昭森社）において、内村の文学観の中に強く功利的態度があり、それが文学にたいする眼をくもらせていると指摘しているし、また椎名麟三は、「キリスト教と文学」と題するエッセイの中で、次のように書いている。

「内村鑑三は、明治から大正にわたつて、当時の青年たちに影響をあたえた、偉大といつてもい

いキリスト教の指導者であつた。だが国木田独歩や正宗白鳥や有島武郎や志賀直哉などは、そのいわば弟子といつてもいい人たちであるが、この私たちの先輩たちが自分の文学を確立することのできたのは、内村鑑三からはなれ、キリスト教からはなれることによってであつたのである。また内村鑑三の文学蔑視の言葉は（たとえダントの『神曲』などを賞めているにしても）、単に當時の日本文学だけを蔑視していたのだということよりは、その根はもつとふかいところから来ているにちがいないと私には思われるのである。」

このように内村に関して論じられた事例は、他にも容易に挙げうるのであるが、良きにつけ悪きにつけ内村が宗教と文学の問題をめぐる重要な提起をしたのは特異なことであつた。では、内村の文学観は具体的にいかなるものであつたのか。

明治二十七年七月、内村が第六回夏期学校で行なつた「後世への最大遺物」と題する講演に注目したい。この講演筆録は、明治三十年六月に一書として刊行されているが、この中で内村は文学の果す役割について述べるとともに、日本の文学者を批判して次のように述べている。

「我々の中に文学者といふ奴がある。誰でも筆を把つてさうした雑誌か何かに批評でも載すれば、それが文学者だと思ふ人がある。それで文学といふものは情け書生おもしろの一つの玩具になつてゐる」と。

それに續けて『源氏物語』を厳しく批判する。